三界と家全

特257
586

始

特257
586

田中胎東著

三界と家

全

京都 氣學講堂發行

序

本書は宇宙の密象、人生の意義を說き人の處世の要諦を論ずる哲學書にして建築學書たり。

方今歐米風の建築益々旺んにして擧世之を以て最善至便生活上最も文化的科學的なりと爲す。

抑々建築の要は人の生存隆榮を維持扶翼するに在り。

外觀の華美、用材の優良、間取の配備、通風採光等の如何は人の生存隆榮の適否を決する末にして其家の保つ大氣の作用如何を以て本と爲す。

本書は從來世の建築學者の說く處と其趣を異にし

主として未だ現代建築學の未踏部分を說述するものとす。

本書は讀者の難解を避くる爲努めて具體的結論のみを直截簡明に論じ其抽象的、科學的原理の解述は之を近刊九氣建築學に委ぬ。

本書及近刊九氣建築學の說く處を正覺し之を實際に應用建築せらるれば四ケ年を出でずして何人と雖も處世安易の歡喜に接すべし。

希くは本書を熟讀せられ之を實地に驗し其眞の幽玄至理なる事を知らむ事を。

昭和己巳穀雨

著者識

三界と家

目次

○家……一
○大氣……二
○自然土……二
○居は動く……二
○家と運……三
○人の先天及後天……五
○家と生命……六
○家と富貴……十

○家と世間……十一
○家と家庭の不和……十二
○家と病氣……十三
○家と緣談……十五
○家と勤務先……十七
○家と老後……十九
○子孫に殘す財産……二十
○九氣建築學の創始……二十一

終

家

○家は天地人三界の接觸點とす。

則ち

○家は上天、無限の高さを有する氣層の底に存し地下、無限の深さを有する地層の頂に置かる。人之に生を營むものとす。

大氣

○地球を包み宇宙に充滿せる空氣を總稱して大氣

と謂ふ。

○大氣は太陽と地球との間を連繫し日夜太陽と地球との爲す作用を稟けて之を六合に傳彌昇降せしめて止まず。

○家は大氣を保有す。

○家の保有する大氣は假令密封穴居すと雖も其外圍を滲透して內外其氣を通ず。

則ち

○家の保有する大氣は太陽と地球の爲す作用を稟けて日夜生々止まざるものとす。

○家の保有する大氣の量及類は其家の形體に據つて定まる。

自然土

○地下三尺の土を自然土と謂ふ。

○自然土は古來曾つて太陽の光熱を直接稟けず無限の深き地心より上昇する土氣を飽含し生氣旺溢潑剌たる生土とす。

○家は其地下自然土より上昇する土氣を保有す。

○家の保有する土氣は密封する程其濃度を加ふ。

○家の保有する土氣の量及類は其家の形體に據つ

て定まる。

居は動く

○大氣の底、土氣の頂則ち地球上に定止するを居と稱す。

○居は地球の表面に定着して人には靜止せるが如く感ぜらるゝも廣く宇宙より之を觀れば地球の自轉及太陽の公轉に據り年月日時に其天地に對する位置を變更移動しつゝあるものとす。則ち

○居は動く別言せば

○居は天地運行の大營作を受け他動的盲目的に動かされつゝあるものとす。

○居は日夜動轉して亦元の位置に再歸するに百八十年を要す。

內、地球の自轉に據る一轉時は三百六十五日五時間四十七分四十九秒なり。

家と運

○自然の成行を運と謂ふ。
○運は人の作爲するものに非ずして人の天地より使命せらるゝものとす。
則ち
○運命とは天地自然の自己に爲す業を謂ふ。
○天地の爲す業、自然の爲す業とは自己以外の他人の爲す業を謂ふ。
○自己以外の他人とは親子、夫婦、兄弟、明友を問はず自己の身體と天地の氣を別個に保有せる者を指す。
○自己に喜怒哀樂の情を起さしむるも亦成功及失

敗の禍福を演ぜしむるも皆盡く此の自己以外の他人の爲さしむる處とす。
○抑々
人の神の加護
天地の德
自然の惠
を稟くるの具體的方途二あり。
一は家と身とを以てし
二は身のみを以てす。
○家と身とを以て天德を稟受するの量及類は其住家の形體と其人の生時とに據つて定まる。

身のみを以て天德を稟受するの量及類は其人の生時の爲す先天と生後止動の爲す後天とに據つて定まる。

○家と身とを以て自然の惠みに浴するを複厚の運と謂ひ

身のみを以て自然の惠みに浴するを單薄の運と謂ふ。

○複厚の運は他動的にして長大且剛く

單薄の運は自動的にして短小且柔し

○家なき人は天地の德を稟くるの基礎其身のみなるを以て其運微弱にして業成り難く緣齊ひ難し。

○人、上長の拔擢、援助、協力を獲んと熱望切願するも其住家之が德を稟くるの基礎なき時は之を得ず。一時之を得る事あるも永保する事能はず。されば

○浮浪の徒は終世運なきものとす。

○人人生の幸慶に悅樂するも或は亦其困苦に煩惱するも皆自己の天地の德を稟受するの量及類の如何に存す。

更らに之を約言すれば

○天地の氣を保つを分と謂ひ住家之を保つを家の分限と謂ひ身體之を保つを身の分限と謂ふ。

○天地の德を稟受するの量及類の如何は家の分限、身の分限に據つて定まる。

○大家は大運を保ち小家は小運を保つものにして大運者小家に永居せば小運に赴くものとす。

人の先天及後天

○懷姙の際母體の稟くる大氣を胎兒の先天の氣又は先天の性と稱す。

○懷姙の際母體の稟くる大氣は母體の在居せる家の保有せる大氣とす。

○家の保有せる大氣は其家の形體に據つて定まるが故に人の先天の性は其生家の形體に據つて定まるものとす。

○世に大臣大將を續出せる名家あるも或は亦祖先遺傳の災眚に惱める舊家あるも皆之が所以とす。

○人の生後稟くる大氣を後天の氣と稱し之を呼吸、吸入して體內の先天の氣に交化せしめたるを後天の性と稱す。

○人の後天の性及運は滿四ケ年以上一定の家に在居せば其住家の保有せる大氣の作用に支配せら

る。

○家は人の先天及後天の性と運とを決定養育するものとす。

家と生命

○凡そ人類を始めとして一切の生類は皆其性を天地より稟く。

○性は之を靈とも謂ひ天地の氣を保有するを謂ふ。

○吾等人類は皆天地の氣の分靈とす。

○人の性は天之を授け其の質は地之を與ふ。

○人の精神は乾天之を授け其の肉體は坤地之を與ふ。

○乾道男を爲し坤道女を爲す。

○乾坤交つて胎生ず。

○心を養ふは氣を以てし體を養ふは食を以てす。

○心氣靜動して身體靜動す。

○生とは天地の氣の保有持續を得るを謂ひ死とは之を失ふを謂ふ。

京都氣學講堂

○氣絶すれば則ち死す。

家其保有せる氣を失へば卽ち滅す。

○人は日に二萬五千九百四十八回の呼吸を爲す。

○人、家に八時間の睡眠を取らば其家の保有せる大氣を自ら無意識に八千六百四十回呑吐、呼吸すべし。

則ち

其家の氣を八千六百四十回吸入するものとす。

○住家の保有せる大氣と身體の保有せる大氣とは互に感應交化して時を經るに從ひ遂に合す。

則ち

○身の保有せる氣は家の保有せる氣に浸差涵養せらるゝものとす。

孔子之を居は氣を移すと謂ふ。

されば

○人の精神及運命は如何に之を人爲的に修養開發に努力するも天爲的に其住家に據つて決定養成せらるゝものと知るべし。

之を更らに別言すれば

○家を取壞つは其天地の德を取壞つものにして之に住せる人の運を取壞つものとす。

○家は亦人の靈の宿る處にして其生を托す處とす。
されば
○家を取壞つは其身を取壞つに等し。
○人、五十日其身體を他へ移さずして急速に其住家を取壞つ時は四ケ月を經て斷じて天地の災眚を招來す。
○人、男女を問はず其年齢十九歳二十八歳、三十七歳四十六歳五十五歳六十四歳七十三歳八十二歳に其住家を急速に全部建替へ或は屋根を剝去する時は斷じて一ケ年以内に惱溢血及心臟痲痺を起して卽死すべし。

之を想へば
○震災后區劃整理を斷行せるは一面果斷刷新の實を擧げたるが如く見ゆるも之を被移動者戸別的に見、又其結果を事實に徵して驗すれば之れ天地の理を無視せる暴擧にして之を改修移造せる家庭は假令巨萬の富を有する豪商と雖も其家族順時生命を傷ひ其營業亦順時不振に向ひ遂に閉店するに至るものにして人道上實に悲慘の極と謂ふべし。
されば
○家を動かすは其生命を動かすものとす。

○家を動かすは亦其運を動かすものと知るべし。

○銀行新築移轉すれば其行運に變化を起し會社增築擴張すれば其社運に變化を起し官廳改築縮少すれば其役所の運に變化を起し

神社其社殿を修動せば其神社の運に變化起り寺其堂塔を增建せば其寺運に變化起り

學校其校舍を改造せば其校運に變化起るものとす。

○築造、移動に據る變化の善惡如何は其移動築造の時期場所の如何と其築造物の形體に據つて決す。

されば

○家の移轉、新築、改築、增築を爲さんと欲すれば先づ其時期、場所を天則に順ふて撰定し然る後實行するの肝要なるを深く戒愼留意すべし。

家と富貴

○富貴は人の爲すものに非ずして天地より之を授かる可きものなり。

○使ふ可きに使はず貯蓄して成せる富は其貯蓄の德にして天地の德の富に非ず。

○人明け暮れ心身を勞し富貴に翹望するも其生涯を盡して之が達成の果を結ぶの極めて寥々たるは何ぞや。

之れ人爲の富貴に齷齪し天爲の富貴を自疆期待せざるに因る。

○人爲の富貴は其根基柔弱にして其期間短く天爲の富貴は其根基剛强にして其期間長し。

○人爲の富貴は其發動の太極を人の身體に置き天爲の富貴は其發動の太極を人の住家に置く。

○人爲の富貴は自ら働いて之を求め天爲の富貴は他人の働きにて之を招く。

○人爲の富貴は待望するに來る事稀にして來るも其量豫期より過少を常とし天爲の富貴は待望せざるに來り來れば其量必ず豫期を起過す。

○人爲の富貴の量及類は人の生時の爲す先天の運と生後止動の爲す後天の運に據り天爲の富貴の量及類は住家の形體に據るものとす。

○大富は大家より興り小富は小家より發す。

されば

○家を棄つるは其富貴を棄つるなり。

家と世間

○自己を中心とせる周圍を世間と謂ふ。

○人は生存上世間と沒交渉たるを得ず。

○人の喜怒哀樂の情を起すも或は亦成功及失敗の禍福を演ずるも皆自己と世間との交渉連絡の如何に存す。

○此の處世上緊密なる自己と世間との交渉連絡の善惡は人の住家の保つ大氣の作用に據つて決す。

○兩親の愛撫教師の薫陶を受けて長成せる子女の十九歳を起えて意外にも不良化するに至れるが如きは皆其住家の爲す作用にして恩師近親如何に之が改悛善導に奔命するも全く其効なきものとす。

則ち

○家の保有せる大氣の作用の善惡が人の處世の苦樂を作出決定するものと知るべし。

されば

○家惡くして處世するは
舵惡くして舟に乘り
城惡くして戰ふものなり。

家と家庭の不和

○同じ家に起居して同じ家の大氣を呼吸する者は假令肉親者に非ずと雖も自然的に順時同化して其親睦を加ふ。

○滿四ケ年其家に靜居する者は必ず其家の家風に染む。

○家風は其家の形體に據り差異あるものとす。

○學校の校風、銀行の行風、會社の社風皆然りとす。されど

○家の內部に橫斷縱斷の壁、廊下の如き家內の大氣を區劃切斷するものある時は必ず家庭內二派に分れ其隔處の所在に依り夫婦、親子、兄弟、雇人等の不和を生ず。

○人の家庭の不和は其住家の保つ大氣の作用に據り起るものとす。

○同じ室に起居して同じ氣を呼吸吸入すれば其親愛濃密と爲り

別の室に起居して別の氣を呼吸吸入すれば其親愛粗薄となる。

○人の家庭の不和及銀行會社官廳學校教會社寺の內部の暗鬪は其建物の改善を爲さすして精神の

修養神佛の祈願人の任免黜陟(チツチヨク)を以て之を根本的に除去するの果を擧ぐるに至らざるべし。

家と病氣

○世に代々相續人たる主人の夭死して老婆、母、嫁、等女子のみ殘る家庭あり。

○家族多少の差こそあれ皆肺肋膜精神病等の遺傳に惱む家庭もあれば或は亦代々實子なく養子相續の家庭あり。

○之等は凡て其住家の保有する大氣の作用如何に

據り來るものにして家の改善を爲さざる時は其家の腐滅せざる限り永世之を反覆繼承するものとす。

○家の起す病は醫診を求めて之を治癒するも必ず毎年一定の時期に至り再發するものにして之を慢性の病或は死病と稱す。

○東方欠陷の家に滿四ケ年以上靜居呼吸すれば左の病を兆生す。

吃音低聲(先天的に來れば啞(オシ))　肝臟　神經痛　小兒發育不良

○南方欠陷の家に滿四ケ年以上靜居呼吸すれば左

の病を兆生す。

眼病　心臓病　氣管支　喘息　小兒消化不良

過食に依る胃腸病　惱病　齒病

○西方欠陷の家の滿四ケ年以上靜居呼吸すれば左に病を兆生す。

腎臓病　右肺病

○北方缺陷の家に滿四ケ年以上靜居呼吸すれば左の病を兆生す。

痔　婦人病　癌　糖尿病　花柳病　中風

○東南方缺陷の家に滿四ケ年以上靜居呼吸すれば左の病を兆生す。

呼吸器病　腸の病一切

○西南方欠陷の家に滿四ケ年以上靜居呼吸すれば左の病を兆生す。

腹膜　胃潰瘍（コウ）　消化器病

○西北方欠陷の家に滿四ケ年以上靜居呼吸すれば左の病を兆生す。

左肺尖　心臓病　咳　血壓亢進

○東北方欠陷の家に滿四ケ年以上靜居呼吸すれば左の病を兆生す

耳鼻の病　肋膜　關節の病（先天に來れば傴僂（セムシ））

○人の生家の兆生する病を先天の病と謂ひ生後居

住の家の兆生する病を後天の病と謂ふ。

○後天の病は短期にして治し易く
先天の病は長期にして治し難し。

○世の四百四病皆天地の氣より發す。

○人の病氣と住家の善惡豈重大緊密ならずや。

○一身の爲一家の爲社會の爲人類の最初にして最要最大の急務は其善良なる住家に一日も早く建設居住するに在り。

家と緣談

○世に祖先累代子女の緣組惡くして嫁すも娶るも共に不緣を喞つに至る家庭あり。

○高貴、巨富の舊家に入嫁して四年目七年目に其婚家潰滅の悲運に遭ひ或は其夫死別の不幸に接し生家に復歸して遂に世を厭ふに至るあり。

○之等は皆其生家或は十九歲迄居住の家の形體卽ち之を具體的に詳述せば
其家の東南方六十度の間の保有せる大氣の作用如何に據り誘起せらるゝものとす。

○抑々女子處世の要道を緣とし
男子處世の要道を業とす

と雖も由來人の生涯を通じて發動司配する大運は其夫婦の緣を齊へるに依つて起る。

されば

○孤身者、獨身者は其生涯を貫く大運を得る事能はず。

○如何に生活豊に圓融無凝なる女子と雖も獨身者は其生涯を通じ必ずや回顧省思して自己の獨身不緣を悔ゆるに至る時あるべし。

○人の生涯を通ずる大運は其夫婦の緣を齊へるに據り起るものなるが故に夫婦の緣の善惡如何は生涯を貫く禍福を決す。

○良緣に歡喜するも不緣に悲泣するも男女を問はず其十九歳迄捿居せる生家住家の作出するものとす。

○美人薄命の理も三十三歳四十二歳を厄年と爲すの因も亦此處に存す。

○世の子女子弟を有する家庭は深く思を此處に致し其將來を誤らざらしめむ事を期すべし。

家と勤務先

○銀行會社官廳の重役高官にして眞に自己に忠實

なる部下の無きに懊惱する者、或は其有爲俊敏なる多士儕々に喜悅する者あり。

○銀行會社官廳に永年奉職格勤して其榮達の遲滯を嘆ずる者、或は學歷なく手腕なくして地位待遇の累進に歡喜する者あり。

○之等は皆其住家の爲す作用にして前者は住家北方三十度の間の保有する大氣の作用として後者は住家東方三十度の間の保有する大氣の作用とす。

○北方欠陷の住家に永居して銀行會社を主宰經營せば唯に忠誠なる支配人部下のなきのみならず

終には彼等に陰謀詐取盜盡せらるゝに至るべし。

○東方欠陷の住家に永居して銀行會社官廳に奉職せば其執務の果不成績にして榮達遲鈍たるのみならず稍もすれば他人と口論論難し不評を招くに至るべし。

○同一銀行會社官廳に繼續して滿十年以上奉職在勤せる者は自己の天運を其銀行會社官廳の運に支配せらる。

○人は十年に一回殊に三十二歲四十一歲五十歲五十九歲には必ず其勤務先と離別の天時あるものにして若し此際自己の地位に變化を受けずして

無事經過せる者は自己の運を制御犧牲にして銀行會社官廳の運に屈せる者卽ち別言せば自己の本心を自制壓迫して所謂長きものに捲かれたる類か然らずんば其住家南方に强き天德を保有せるものとす。

○三十二歲四十一歲五十歲五十九歲に來る

奉職者の辭任期

事業家の被後援中斷期

血緣者の生別死別期

を善處し得ると否とは其住家南方三十度の間の保有せる大氣の作用如何に存す。

○家は人の離合を支配するものとす。

家と老後

○老ひて其子の死別に遭ひ老ひて其子の不幸に惱むは其老親の住家の爲す作用とす。

○盡せる味方が敵と叛き親愛の知己が不和と變るは其人の住家の爲す作用とす。

○南方缺陷の家に出生永居せる子女は其生後の後

天作用に之が防止を爲さざる時は四十歳臺に死亡するの先天の運を有す。

○北方缺陷の家に出生永居せる子女は如何に保護者警戒監督するも十九歳を超えて自然的に色情の難に陷るべし。

而して

○如何に敬愛篤信の親友知己と雖も其交際より四年、七年、十年、十二年目には必ず離叛不和の時期來るものにして此の節を經て再び舊交を回復するとせざるとあり。

○諸行無常變り易きは人生の常とは謂へ老ひて愛子に別れ親友と離るゝに至るが如きは皆其住家の保つ大氣の作用に在るものにして決して天を呪ひ人を怨むべからず。

されば

○人の眞の老後の安定は人爲的に其財産の蓄積永保や其子孫の教養善導に懸命惠念するも其住家之が天地の德を有せざれば之を得る事能はざるものとす。

子孫に殘す財産

○天地の德を稟受保有せざるものは其財を蓄積永保するを得ず。

○子孫の爲美田を購ふも子孫にして之が保有の天地の德を稟くる事微弱なる時は之を維持確保する事能はず。

○天地の德を稟くるは家と身とに在るが故に家と身との靜動變化卽ち移轉新築改築增築は必ず之を天道に則るを要す。

○此の天道に則り人に幸慶を招來する建築學を九氣建築學と稱す。

○家の富の保有力は身の富の保有力の七倍を有す。

○大家は大富を保有し小家は小富を保有す。されば

○人の子孫に殘す財産の最初にして最要なるは其天地の德を稟くるの器たる其住家とす。

九氣建築學の創始

○下降せる天氣
上昇せる地氣
を人に善用實施し其處世を安易ならしむる建築

學を九氣建築學と稱す。

○抑々

宇宙の森羅萬象は

色と數との二より發す。

○色と數との基は之を光と爲す。

○光は大氣の振動にして

其振幅の長短に據り

光色の差異と振動の度數を生ず。

○振幅の長きは振動緩少にして

振幅の短きは振動急多なり。

○振幅の長さを計る單位を三分三厘の百萬分の一

とし之を一ミリミクロンと稱す。

○判明せる大氣振幅の最長は三十四萬ミリミクロンにして其最短は四十二ミリミクロンとす。

而して

○人の肉眼に映ずるは七百六十ミリミクロンの赤色より四百ミリミクロンの紫色に至る七色たり。

○振幅四百ミリミクロンより短き卽ち振動非常に急速なる大氣と振幅七百六十ミリミクロンより長き卽ち振動非常に緩慢なる大氣は之を人の肉眼に見る事能はず。

○此の人の肉眼に見る事能はざる大氣の內振幅短

き卽ち振動急速なる大氣は之を呼吸、吸入せる人の心臟を激動死滅せしめ、振幅長き卽ち振動緩慢なる大氣は之を呼吸、吸入せる人の胃腸を鈍怠消化不能に陷らしむ。

○振動急速なる大氣を呼吸、吸入せる者は其考慮躁鋭正鵠を失し其行爲輕斷浮擧となり振動緩慢なる大氣を呼吸、吸入せる者は其考慮遲鈍程中を失し其行爲偏曲怠隋となる。

○人の健康は心臟と胃腸を基根とし人の運命は考慮と行爲を基根とす。

○人の健康及運命は大氣の色と數とに據る。

○振幅四百ミリミクロン以下及七百六十ミリミクロン以上の大氣卽ち人の生存に適せず之を尅害する大氣を殺人光線、金氣、金神、尅氣殺氣死氣等と稱す。

○大氣の振動は
太陽の白熱より起り
地球の寒冷に止まる。
之を更らに約言すれば

○太陽は大氣の動を起し
地球は大氣の靜を起す。

○太陽は大氣の明を支へ

地球は大氣の暗を支ふ。

○人の體内を循還する氣は卽ち此の大氣にして心臟之を調制す。

○心臟若し之が調制を誤らば發熱發病を見るに至るべし。

○此の天地の氣を調制鹽梅(アンバイ)し之を人の生存に恰適せしむる機能を家と爲す。

卽ち

○九氣建築學は人に天神地祇の大德を降下善用せしむる家を企劃設計建築するものとす。

○現時思想の動搖は其基人の處世の苦惱卽ち生存の不安より來る。

○九氣建築學を提唱奬勵するは國利民福の元にして刻下國家の急務とすべし。

(昭和四年四月稿)

三界と家終

323
367

昭和四年六月二十日印刷
昭和四年六月二十八日發行

定價金七拾錢

版權所有

著者　東京府豐多摩郡井荻町上井草千八百二十五番地　田中胎東

發行者　京都府乙訓郡西向日町上植野拾番地　古川勝鬣

印刷者　京都市夷川通川端東入　早崎鶴之助

印刷所　京都市夷川通川端東入　弘文堂印刷部

發行所　京都府乙訓郡西向日町上植野拾番地　氣學講堂

終